

人工長命時代を考える

——「老年問題に関する京都国際シンポジウム」を省みて——

吉田 寿 三 郎

はじめに

昨夏社会医学ならびに社会学中心の「老年問題に関する国際シンポジウム」を国立京都国際会館で行なった。そのプログラムは下記のようにおおむね運んだ。

1978年8月28日(月)

・受付 9:00

・開会式 10:00~10:30

10:00 開会挨拶 奥田 東(日本 WHO 協会会長, 元京都大学総長)

:10 祝 辞 園田 直(外務大臣)……愛野興一郎(政務次官)が代読

:20 祝 辞 W・ビィティ (シラキューズ大学教授, 国連老年問題顧問)……(F・チャーチ祝電紹介を含む)

祝 電 福田赳夫(内閣総理大臣)……西尾雅七博士が紹介

・シンポジウム(1) 10:40~13:00 司会 吉田寿三郎

議題(1): 老年問題の研究ならびに施策に関する基本的理解

10:40 問題提起 吉田寿三郎(大阪医科大学教授)

:50 講 演 勝平宗徹(臨済宗大本山・南禅寺派管長)

11:30 講 演 市川亀久弥(同志社大学理工学研究所教授)

12:00 講 演 R・バトラー(アメリカ合衆国国立老年科学研究所所長)

:30 質疑討論 (古守豊甫博士の追加を含む)

14:00~14:30 F・チャーチ(アメリカ合衆国上院議員)緊急の用件にて欠席, 代りに藤平光一氏の「気の道」実演

・シンポジウム(2) 14:30~17:00 司会 金子仁

郎

議題(2): 社会が老化することによって生じるさまざまな問題

14:30 問題提起 金子仁郎(関西労災病院院長, 元大阪大学教授)

:40 講 演 篠崎信男(厚生省人口問題研究所所長)

15:10 講 演 丸尾直美(中央大学教授)

:40 講 演 W・F・アンダーソン(イギリス・グラスゴー大学老年医学教授)

16:00 “ G・コーエン(アメリカ合衆国国立精神衛生研究所老年精神衛生センター所長)

:20 質疑討論

・参加者交歓パーティ 17:30~19:00

8月29日(火)

・シンポジウム(3) 10:00~12:40 司会 増田光吉

議題(3) 公的支持と家族・隣人支持との統合

10:00 問題提起 増田光吉(甲南大学教授)

:10 講 演 雀部猛利(関西大学教授)

:40 講 演 吉田寿三郎

11:10 講 演 W・ビィティ

:40 質疑討論

12:10 閉会の辞 R・バトラー

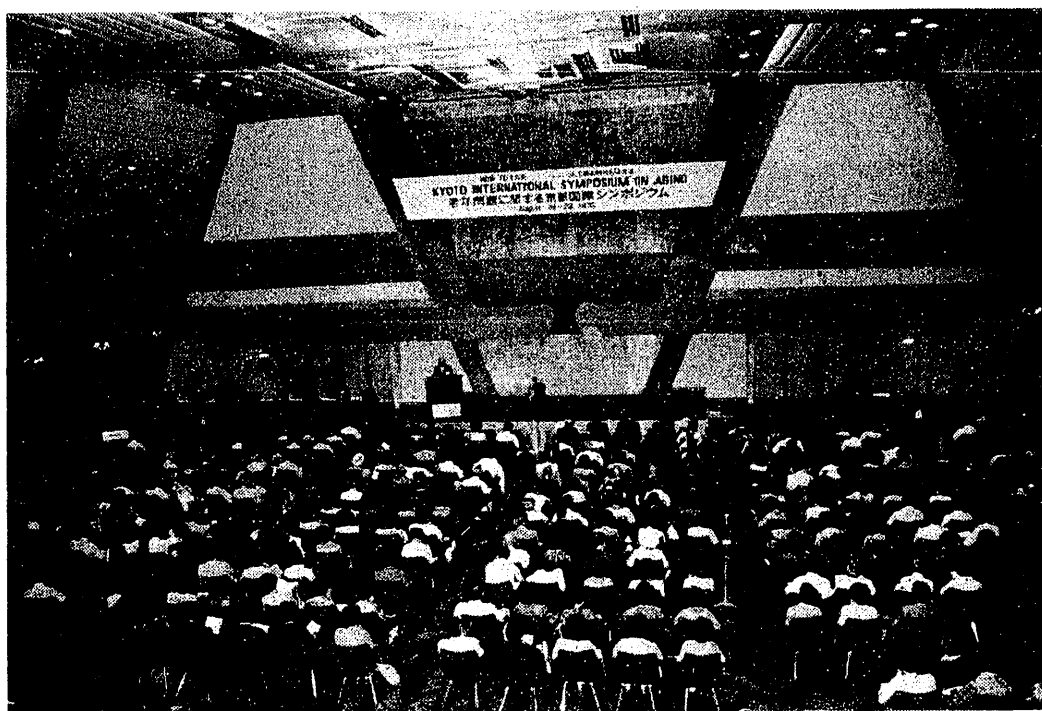
閉会の辞 西尾雅七(京都大学名誉教授)

・大徳寺にて昼食(鉄鉢料理)

・スタディ・ツアー: 西陣堀川地域ケア, 西陣会館にて質疑討論

マクロとミクロのプロフィール

この国際学会は大所高所から“人工長命時代を考える”ことを標語にして, 一般公開で公用語は日本語, ただし外人には英語の同時通訳という, 従来の学会とはかなり趣きを異にしたものであ



た。

第一議題「老年問題の研究ならびに施策に関する基本的理解」という問題提起については司会の私、吉田が説明した。80歳台という現代人の平均天寿まできわめて多数のものが生残する。このように高齢期まで、生れた大多数のものが生存することは一般生物界ではもちろん、人間の場合もなかった。かかる長命はつい30~40年この方の、未曾有の新事態である。先進産業高度化社会では70歳台までの生存はわりにたやすい。しかも脳卒中、癌、心疾、痴呆、事故などの起った場合を除けばセルフ・ケアで生存できる。というのは、優れた化学療法、暑い寒い環境調節、栄養の充実などの物的条件をかなえれば可能であるし、かなえやすいためである。

上記のような次第で、これからは先進国では、80歳台へ挑戦するものが夥しく多数になる。この場合には上記3つの物的条件の充実だけでなく、ここで兩三年を生き延びることすら、より若い世代の手厚い支えが不可欠な場合がしばしば起る。反面、植物人間になっても最新の医学はなおおかし続けていく可能性を開いている。まさしく人工長命時代といえるであろう。現に高齢期へ多数のものが挑戦している欧米諸国ではその対応に全く

行き悩んでいる。完璧に近い夫婦中心主義も個人主義も80歳台になると、その厳しさに耐えられないものが大多数になるからである。この人工長命時代を人間らしく生き抜くには、今日の科学偏重を大きく反省して、ミクロな考え方への執着からマクロな考え方へと一転する、つまり未曾有の新事態に対応できる価値観の革新を、それも極めて緊急なこととして成し遂げなければならないのではなかろうか。

このような観点からの問題提起が第一議題であって、日本の演者としては、南禅寺管長の勝平宗徹老師と同志社大学教授で創造工学専攻の市川亀久弥先生を選んだ。そしてこのレクターをアメリカ国立老年科学研究所所長のバトラー先生が買って出て下さった。以上のように紹介した。

勝平老師は宗教的時間を、中国の高僧趙州禪師と四国妙好人庄松、さらに岡山時代の良寛和尚を例に、いまの一瞬は無限の過去であり未来でもあることを証された。そして生れたからには死ぬための毎日であると論された。人工長命は人力が自然のルールに抗して創りあげた悩みであり難しさである。これを解く鍵として宗教的時間を語られたわけであった。東洋的な素養の多少とも身に滲みている日本人には老師の話は素直に受け入れら

れたであろうが、外人はどのように受取ったであろうか。

市川先生は生存しているものの消滅を鋭く衝いて、この限界にあえて挑戦していて、科学技術そのものが目的化している最新医学の非理を明らかにされた。そして生理的人間へのサービスには厳しい限界があるが、人格的人間へのそれは無限の人間性豊かなサービスの可能性があることを指摘された。また人類文化史的には、只今の老年問題を一大変革の逼迫した証かしの一つとして捉えて紹介された。その基底には全自然学の深淵な思想があったが、日本人も外人も多くのはよく理解できなかったのではないかと気にかかった。

バトラー博士は勝平老師の宗教的時間に興味をもった様子であった。彼が想像していたよりか深みのある日本人演者らの論述には直ちに応ずることは難しい、と率直にいわれてから、アメリカ人らしい余裕をもって、老人問題に対応していく高邁な人類愛、地球愛を述べた。アメリカの顕職にある方からこれ以上のレアクションは時間が許しても聞き出すのは難しかったのではなかろうか。

第二議題「社会が老化することによって生じるさまざまな問題」という問題提起について司会の金子仁郎先生が説明された。急速な人口老化が、日本の場合人工長命に重なって、イギリス以上の困難な高齢化が将来に起ると推測される点を強調された。

この議題の第一バッターは篠崎信男先生で、日本の人口問題の未曾有の厳しさを内外の生なましいデーターを図表化して、淡々と紹介された。このあと、バトラー先生から図示した人口趨勢はアメリカ合衆国もとるとつめよられたが、篠崎先生は用意していた国連のデーターを示されて、日本の特殊性をバトラー先生は文句なく諒承された。これは個人的な話合で起った議論であったが、後日篠崎先生は私にこのようなことがあったと語った。

アメリカ始め西欧諸国の指導層、それが老年問題の大家にあっても日本の実状などについては意外にご存知ないというよりか関心がないと言って過言でないであろう。それだけに心してこのよう

な点を認識してもらう努力を当方は積極的にしなければならぬわけである。また自分たちのことは自分たちから相手に知らず努力をするのがむしろ欧米人からいわしめれば当然なことであると思う。とにかくこのような意図も含めてひらいた、このシンポジウムで、バトラー先生は待ち受けていたところへ個々人の間ではあったがはまってこられたことになった。

この第二議題では、イギリスという島国で工業化のパイオニアが日本の将来をうらなうのに好対照である。このようにみて、両国の経緯・社会・保健の三つの面を総合比較して、日本の人口老化の苛烈さをより迫力ある表現で、ことに外人聴衆に示したかった。しかしいろいろ搜したが、これら3つの事項を踏まえて話してもらえる演者をさがしあぐねた。そして社会保障制度審議会関係者の推挙で、丸尾直美先生に経済と社会について論じてもらうことになった。

丸尾先生は日本の人口老化がもつ経済・社会へのマイナスに係わる諸点について話された。そしてその厳しさへの対応策には諸因子の総合化が必要であると説かれた。

この議題に対する外人レアクターの一人であるアンダーソン先生は氏の老人観ならびにコミュニティ・ケアの重みについて、豊かな体験の滲む口述をイギリスの実情を踏まえてされた。「靴をはいたまま死にたい」と人工長命時代の死の理想を結びにされた。聞くものは等しく深い感銘をうけた様子であった。第2の外人レアクターのG・コーエン先生はバトラー、ベネディクト両博士とともにアメリカ合衆国のその筋の三羽鳥とのことである。アメリカも老年問題にはかなりいろいろ苦心をしているという話であった。

外人レアクターは二人ともに医系であるので、古守豊甫医博に、棚原長寿村が短命村へ移行する傾向のあることを例証として、日本人の体位、体力の変化を紹介、健康問題の将来に触れてもらった。

第三議題「公的支持と家族・隣人支持との統合」の問題提起について司会の増田光吉先生が説明された。先生は人工長命によって扶養の重みが

著しく増大していく。これに小規模化した家族が耐えて機能するためには、公的支持は必要不可欠であるが、他方私的支持はこの公的支持が健全であることのためにもなくてはならない必須条件である。そしてこの両者を統合する研究の必要性から議題は設定されたと紹介された。

この第1演者の雀部先生からは、日本の前近代的な家族・近隣を中核とした支持が、敗戦をへて近代的な公的支持へと、支持の重点が急速に移っていった史変遷を述べられた。そして、これからは両支持の統合を考慮研究する段階にきており、日本は近い将来むかえる老化の緊迫性から、欧米先進国に先行して、その範を示すべきであり、また示しうるのであろう、と主張された。

続いて、日本人演者の私、吉田はこの両支持統合の背景になる思索を生物の二大原則によって展開した。この論述については、本論文の後半にその大方を掲載したので、ご高閲をいただきたい。

第三議題の外人レアクターのビィティ先生はアメリカ人の好々爺らしく、老後における能力の開発と自立について、かなり具体的な対応の諸事項を紹介された。

閉会の辞を、外人としては、バトラー博士が述べた。彼は、老年問題研究において、日本はアメリカの好敵手になるとし、アジア発展途上国にも起るであろう厳しい老年問題に対する、よい先達者的役割を果たすであろうことを期待する、などと述べられた。日本側としては、西尾雅七先生が閉会の辞を述べた。本シンポジウムで企画者たちが最も強調したいと思っていたこと、すなわち、日本は人類文化史上の一大転換の先陣をいや応なく引受けなければならない苛烈さについて警告され、最終をきわめて印象的な終幕で飾って下さった。

スタディ・ツアー：西陣地域ケア

閉会に引き続いて、外人を主体としたスタディ・ツアーを行なった。参加者は40余名であった。大徳寺で鉄鉢料理を昼食に賞味してもらった。ほとんどの方が平げられたのは提供者として嬉しい驚きであった。見学は西陣堀川の地域ケアであった。現地では六組に分かれ、家庭を訪ね、芸術産

業の町がつなぎ育てた人間性の豊かさがこの地域で展開するケアを見せた。アンダーソン、バトラー両先生を初め見学者はみな日本人演者の論述が単なる机上の空論でないことを認め、感概は一入深かった様子であった。陋屋の古畳に坐り込んで、いつまでも両先生は、患者家族の差出す茶などをすすりながら、熱心に話しこんだ。

恐らくは産業高度化に破れ果てた人間関係に苦しむ日本の都会人の多くは、このような日本的伝統のなかで近代的な脱皮が行われ、輝かしい脱産業化社会の真意が人間味豊かな地域ケアを展開しつつあることを信じられないのではなからうか。欧米文明をこの100年間専ら吸収し、ことに戦後はアメリカの影響をいたく受けた。アメリカという大国でこそ可能なルールを狭隘な日本の土壌のうえにあえて植えようとした。人工長命、そして高齢化もその表現の一部と見る。世界的規模の人類文化史的大転換が訪れようとしている。その前段階で日本人が個人また集団でこれに対応するためには、日本の、アジアの先人が創った文化遺産をも省みて、ここに新しいタイプのエコロジカルな——さらに前向きに表現すればエルゴロジカルな——均衡をつくりあげる、そんな方向を探し出すことが喫緊の課題であろう。

このような明日への命題を内外のひとびとともども考えることを試みたのが、昨夏の京都におけるシンポジウムであった。このシンポジウム開催中に内外の演者からしばしば述者の名前が口上されまったく恐縮した。とても一人や数人の力でこのような盛り上った学的集いがもてたわけのものではない。これはひとえに多くの老年問題を憂える方々の暖かい心の連鎖反応が起ったの成果にほかならない。むしろこれによく開催者側は答えたのであろうか、と深く反省している。とにかく、なお日本の社会は若さを残している。その若さを将来に生かす運動をすすめたい。存外速かに日本人は迫っている困難さを納得し、しかも一転して雄雄しく立ち上がる希望なきにしもあらず……とこのたびの盛んな京都の集いは語っているように思える。そう思うと述者の気持ちは弾まざるを得ないことを告白する。

舞台裏の一端

実はワシントンではコーヒ・ブレイクしか接待しないと約束してきたのであったが、外務省などが、超一流の英米学者が参加する、またF・チャーチまで挨拶にわざわざ京都まで来る。という状況であったので、礼を欠いてはと心配した。そこで最小限の接待はした。たとえば堅苦しい学会雰囲気なを柔らげ、また参加個々人の気楽な談話の機会にもと思ったので、集い第一日の夕刻にささやかなカクテル・パーティを開催者側の負担で行った。外人と日本人がよく交ざるようなテーブルの組合せをと考えてもみた。しかし、こんな統制的なことを行う余裕もなくパーティが始ってしまった。

会場は京都国際会館で一番大きな「桜の間」であったが、600名以上の参加でいっぱいになり、まこと賑々しい集いになった。林田知事の挨拶で始まり、アンダーソン博士がこれを受けられ、奥田東先生の音頭で乾杯した。不思議に日本人参加者は適当にテーブルに別れ各テーブルには外人が適当に位置していた。つまみに飲物だけのパーティであったが、いつ打ち切ろうかと思うほど、ゼスチャーもたっぷりな交歓が和やかに続いた。散会を告げるまで中座するものはほとんどいない、日本人としては満点をつけた集いできた。困みに、このパーティの総経費は締めて42万円ばかりで、これならばこれからはあまり負担を感じないでできるのではなからうか、と一同語った。

三つの議題と悲喜劇

このたびの国際シンポジウム開催にいたる経緯について、多少つけ加えると――

京都で国際シンポジウムを行うことをアメリカの老年学会が熱心に要望していた。そして関西の私たちにその面倒をみるように要請した。しかし、開催費の大部分は日本もちということで先方の真意のほどを疑った。アメリカ合衆国は巨大な力をもつ国でありながら、とかく日本の将来の厳しさも考慮しないで何かと無理難題をもちかけてくる。そこで率直に言って、あまり私らは気乗りしなかったが、情勢はそうもいかないと判断した。とにかく、彼らは日本の実情と日本人の自由な見解を聞きたいという注文であった。

アメリカの真意はとにかくとしてせっかく知りたい聞きたいと言ってくるのであるから、これに答えることによって、逆に老年学者という搦手からではあるが、多少日本の事情なり、日本人の気持なりを知ってもらえる積極的な機会にしよう。それがよし成果を挙げえなくても、日本人が「老年問題」についての認識を深める手立てにせひしてみよう。このような気持から述者はシンポジウム開催に努力をしていった。

金を工面する上からも、まず議題を明確に設定しなければならなかった。上述の趣意からお解りになるであろうような既述の三つの議題を決めた。この三つの議題に共通することは、人工長命問題はその一つの現れであるが、世界は好むと好まざるに拘らず、大変革を迎えようとしている。日本はその最先端に立たされている。しかし早晩アメリカもソ連もこのままでは破滅的な洗礼を受けるであろう。このような認識を共通の広場として、話し合える可能性にさぐりを入れようとするのであった。

どれほどの成功の見通しもなかったが、関西電力と日本生命に依頼の私信を差出した。さっそくにも前者の副会長の石黒久先生から会おうと言ってこられた。40分も私の話しを聞きその場で支援を約束して下さった。結局日本生命、さらに松下電器にも話すことになった。このような大企業の責任者から、述者の設定した三つの議題に深い関心が寄せられ胸の熱くなる思いであった。

紆余曲折あって、一応国立京都国際会館Aホールの使用可能な期日を確かめて渡米した。それが去年の4月18日であった。シンポジウムを折角行おうとすれば、せめて一流のアメリカの学者一人はと思った。ワシントンへの途上シカゴに寄った。イリノイ大学のシャナス教授――わりに日本人によく知られている方――の参加意向のあることを確かめえた。このシカゴで知己になった大迫助教授は後日何かとよい秘書役をしてくれた。

ワシントンについて、とかく応答の遅れていた先方の事情などわかった。このシンポジウム開催の熱心な要望者であったビンストック博士（前アメリカ老年学会会長）は心筋梗塞の発作でポスト

ンで入院していた等々……。他方三つの議題は大へん彼らを魅了したもののようであった。第一議題へはバトラー先生が挑戦すると約束し、第三議題には現アメリカ老年学会会長のG・マドックス先生（デューク大学教授）が取組むと申出があった。また、第二議題の演者としては、イギリスのF・アンダーソン博士をぜひと彼らが推挙した。このような超一流の英米学者が参加表明をしたので、アメリカ上院の老年問題委員会委員長のF・チャーチが挨拶に出向くということにもなった。周知のように、彼はロッキード事件で、チャーチ委員会をつくって、権力に屈せずその是非を追究した、剛直で良識あるアメリカの実力政治家である。

述者はそれなりに重要さをもった議題である、と自負はしていたものの、日本の大企業の幹部が興味を示し、アメリカではまたその筋の実力者が大きく関心を寄せた。このことは既述した述者のシンポジウムに努力した狙いからは願ってもないことであったのだが、実はワシントンで二日間考え込んでしまった。

というのは、アメリカ側はすくなくとも150名は参加するというので、400名入れる会場を予約してきた。それもそれしか実は京都で会場がなかったからでもあった。しかし、アメリカからの参加は50名を割る恐れもあった。他方、日本側でそんなに多くの聴衆が集まる予測もなかった。また外人演者一人に対してシンポジウムの主旨からいって日本側は二人の演者を立てなければならなかった。果して短時間に適当な人選が可能かが大きな懸念であった。組織委員会など形を整え、開催母体を探し出し、また事務局も新しく発足させるほかなかった。その上で少くともさらに10数社の企業を説得し募金に成功しなければならないなど数多くの難しさについて考えさせられた。

考えぬいた挙句、誰に相談しようもなかったが、あえて開催を決意して、先方と約束文を交換した。上述の努力目標を多少とも実現するには、この絶好のチャンスを見逃すことはできない、そう決意すると使命感が湧いた。

ボストンへ飛びビンストック博士を見舞った。さすがに喜んでもらえた。外科措置を要する重症

であることを知った。ついでアリゾナのツーソンへ飛んで西部老年学協会のボスに会った。アメリカ人参加者の動員方を依頼した。帰国は5月15日になってしまった。

それから5日に4時間たらずの睡眠の苦闘が始まった。個人の力ではどうにもならない。また好意ある数人の力をよせてもどうにもならない。そう知ったとき祈る心が起る。祈る気持が安心を呼び勇氣に変わった。そして、祈りに答えるかのように盛会がもてることになった。事務局は開会一週間前になったとき参加者が急増して700名を超えるという伝えてきた。半月前の募る憂えは一変できた。Aホールを最大収容の780座席へ模様変えした。開会3日前からは申込みを断った。二日とも二階の予備席まで超満員の賑々しい集いになった。この奇蹟を誰がつくってくれたのであろうか、私は心から感謝した。

国際学会から国内学会へ

この2月19日新阪急ホテルで最終の組織委員会を開催した。予定主題は協力感謝することとプロシーディングス編纂を計ることとであった。これに先立ってシンポジウム参加者を対象としたアンケート調査をして、引き続いてのこのようなシンポジウムを設定してほしいという希望を多くから受けていた。はからずも奥田東先生からも同様な御希望があった。そこでこの種の国内学会を今年もぜひということになった。組織委員会は新しい集いの組織の中核を約束して下さることになった。

省みて、既述してきた「老年問題に関する京都国際シンポジウム」が、短期間に、微力なものが企画実施したに拘らず、なぜ予期しないほどの盛況でありえたのであろうか。いろいろな見解があるなかで、魅力的であった理由の一つは、スカラーのみの交見の場としないで、広く関心をもつすべての階層の方々に参加の扉を開いたことであったらと思う。ことに、老年問題はそのような性格をもった集いが必要であると信じている。そこで、本年は京都シルク・ホールで8月31日（金曜）と9月1日（土曜）の両日、「老年問題に関する京都国内シンポジウムを」開催することが決っ

ている。来年も同様どこかで国内学会を催し、1981年には国際学会をと関係者一同大いに夢をふくらませている次第である。因みに、F・チャーチ・アメリカ上院議員からは、国連に1982年を国際老人年にすることを提案して容認された。ついでには日本における国論を大いに喚起して欲しい、という私信ももらった。またシンポジウムでは祝電に上述の主旨が述べられていた。国際老人年とはとにかくとして、日本人は老年問題を自分たちの当面する緊急かつ重大な課題として、彼にいわれるまでもなく取組まなければならないことであろう。

以下に第三議題の演者としての述者がした口述のおおむねを掲載する。

雀部先生からは、明治以降の史的回顧と展望を通して、『日本の社会はアジア的な、前近代的なものの尾を引きながら、欧米の文明・文化を急速にとりいれた。その過程で、ことに戦後産業の高度化を通じ、家族制度的なものから夫婦中心へ、隣保的な形から個人中心へ、そして小域の相互助け合いから国の責任へという方向へ変っていった。このようにして公的支援は日本でも充実される過程にあるけれども、それだけでは老年問題は上首尾に解決されそうにもない。家族・隣人の支援を考え直してみなければならないしそのようにもなっていないかざるを得ないであろう』。このような話があった。

かかる歴史的な変遷を重視する一方で、弱っても死ねない厳しい「人工長命」の実態を考慮するとき、夫婦心中ないし個人主義のもとで、公的支援だけでは「人工長命」が提起する「老年問題」への対応はとてもできないと思う。このことを福祉国家であり長寿国であるスウェーデンの実態に触れてつくづく感じたことであった。ところが1976年には44年間高福祉・高負担の政策をとってきたスウェーデン政権がその座を去らなければならなくなった。この事実は上述の私が20年前に直感したことがそう大きく誤っていなかった具体的な証しといえるであろう。またアメリカ合衆

国では老人村が簇出している。これらは80歳台への挑戦が容易なものではないことを思わせるに足る社会現象であろう。

産業高度化を行った先輩諸国の、このような実態と第二議題で問題にした、日本の厳しい条件を併せ考え、これからの老年問題の対応を考案する上で見逃すことのできない事項について検討してみようと思う。本日私は方法論よりか、より根源的な原理を考えていきたい。人間の在り方について、それも生物医学的な立場からその話を展開してみたいと思っている。

『人は死ぬものである』とは洋の東西をとわず誰もが認めているところである。これは個体のエージングが不可避な現象という前提に立てば当然の帰結である。この点を生物医学的に多少検討してみると、

現代生物医学が十二分に根拠づけている生物の特徴である新陳代謝、世代交番、個体変異からみても、また生命現象は無機と有機の間にあるとする最新の生物医学的研究からみても、生物は矛盾の存在であるとしてよいであろう。この矛盾の存在である生物が時間の経過、つまり加齢、さらに換言すると時間の量を増加していくとき、当然これに対して質的な変化が起るはずである。これが生誕、成長、成熟、衰退そして死というエージング現象である。となると、老化防止、つまりエージングを否定することはエージングという変化の背後にある矛盾の機構を否定できるだけの人力、すなわち仏教哲理や弁証法などを否定できる力を人間は創造開発しなければならないことを意味する。これは全く至難なことであることは多言を要しないところであろう。

そこで、『人は死ぬものである』となると、この有限の限界、つまり現在の80歳台という死の壁を人力が押しやって、よしんば160歳台にできたとしても、結局個体にはエージングの結果早晩終りがくる。この点では80歳も160歳も五十歩百歩の違いである。人間はどちらにしてもおなじ有限の問題、それもこれからは多くは老弱病弱の果の死の問題に遭遇する。そこでこの有限性に由来する問題にどう取り組んで行くべきかが本議題の

理論的検討に関連して重要な原点になると考えているわけである。

ここで人間個体の有限性はしばらくおいて話題を変えたい。イギリスの名宰相であったチャーチルは社会保障の整備・充実に関してヴィバリッチ卿を起用した。その財政論のなかで言うところ、次のようなことを私は「老年問題」と関連して高く評価している。つまり、彼は所得の再分配を労・使間とか高・低所得者間とかいう社会階層間だけでなく、幼老と若壮のような年齢階層間における優劣の間においても行うべきであると主張している。というのは、このような人間一生間における所得の再分配を行って、ここに社会保障財政をよりよく確立できるというのである。このような主張にもとづいて社会保障制度を実現した国がイギリスであり、スウェーデンである。この意味で、これらの国ぐにが福祉国家と呼ばれるに値するものであると思う。日本の国はそういう風にはとてもなっていない。

西欧福祉国家はこのような卓越した所得再配分機構を確立したが、なおかつ老病弱者への恩恵が十分届きかねているというのが、私がこれらの社会の裏街道を詳さにみて歩いての事実である。とかく弱者の中の強者がより利を喰むのが事実である。そこで真の弱者に物が届くためには、人間性豊かなサービスの欠除があってはどうにもならないことである。このような認識以来私はスウェーデンなどの国ぐにを“北欧型福祉国家”と呼び、とくに産業高度化を進めた社会では真の福祉実現のためにはサービス——それも金で購うことはできない人間性豊かなサービス——の必要性を強調してきた。そしてこの方法を所得の再分配とアナログ的に人間一生間における「サービスの再配」と表現している。

所得再分配——つまり物の再分配——は社会保障制度という財政機構によってほぼ可能であることは北欧型福祉国家が立派に証明してくれた。では「サービスの再配」——つまり心の再分配——はどのような機構によって可能なのであろうか、ということが問題になるであろう。

サービスは人と人との触れ合いのあるところで

できるものである。40億近い世界の人口にすべて触れうるわけにはいかない。生れたその日から80歳まで、年に350日平均、日に8時間、1分間ずつ瞬時の間をおかず人に会う——これは全く不可能なことであるが——そう仮定しても300分の1の人にしか逢うことができない計算になる。仏教では人と人との触れあいを『袖ふれあうも多少の縁』といって、これを大切にしている。けれども……。全くもったもななことと思う。

先に述べたように、人間個体は有限である。にも拘らず、北京原人が出現してからでも50万年という長い間人類はエージングを続けてきた。人類の存在は数百万年にわたると考えられている。この長さを人間個体の寿命と比較するとき、有限のものが無限に近く存続しているという大きな矛盾を感じないわけにはいかない。

では人間も含めて生物永存の基本的条件は、ということになる。つまり、生物界は有限のものが無限に存在するという矛盾をどのようにして解いているか、を眺めてみたいと思う。

森羅万象は流転し大自然は矛盾の構成であることを自ずから語りかけている。これに対して生物は、現代生物医学からみても、また矛盾の存在であって、これでこそ無常な大自然の一員である資格をもっているようにみえる。

実は「人工長命」の成立を医学的ならびに社会的背景から考察してみると図1のように、矛盾の過程を経てこれも展開され新しい課題をわれわれに出題している。

さて永存についてであるが、生物には、たとえば男・女、雄・雌という矛盾関係がある。これを対とも表現できるであろう。あるいは正と反という言い方もできるであろう。中国式に言えば陰・陽ということにもなる。実はこの正と反、男と女というものの触れあいによって合としてここに生命の延長の可能性が開ける。自然界はこのような矛盾の機構をもって有限の個体が無限に生きていく摩訶不思議を可能にしている。

この機構は周知のように“生殖”という言葉で呼ばれ、また“世代の交番”という言葉でもいわれている。つまり、生物が永存するためには雄と

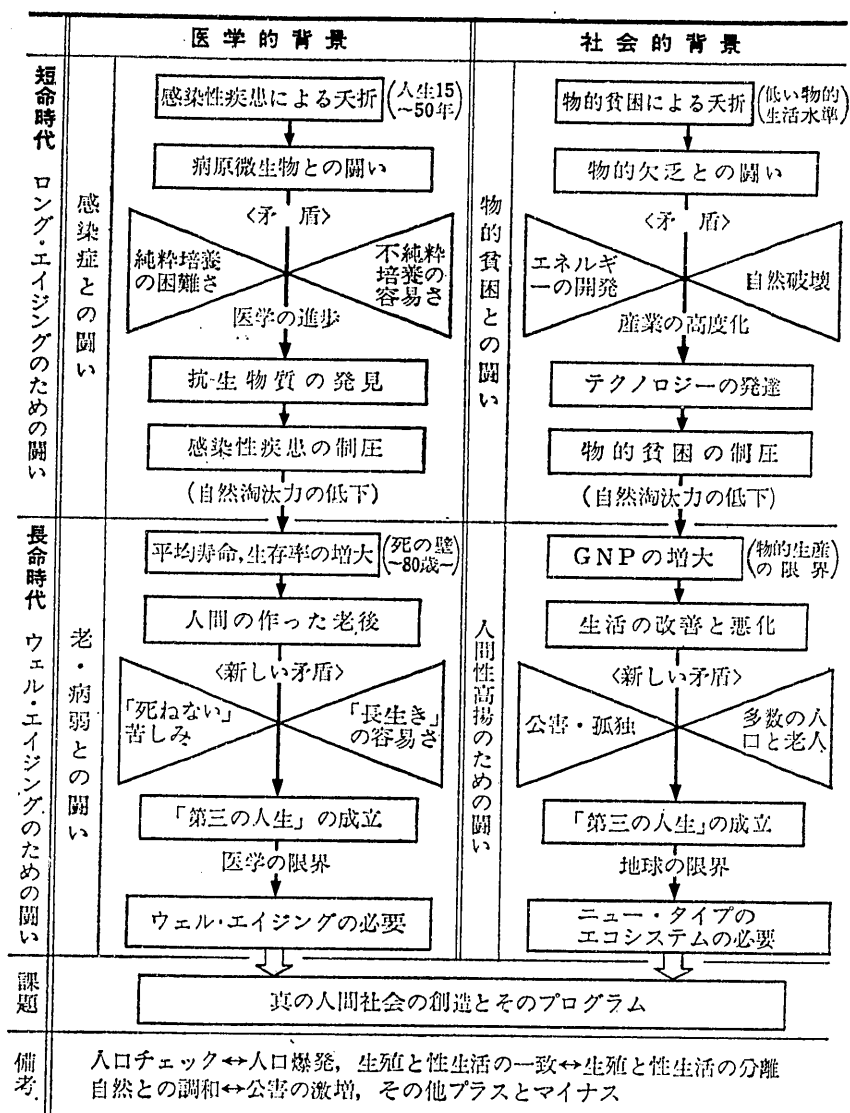


図1 人工長命成立の医学的・社会的背景と新課題

雌という矛盾が必要であり、人間が永存するためには男と女という矛盾が必要なのである。そしてその触れあい、つまり合が永存の不可欠な要件である。そこにはまた親子関係という触れ合いが必然的に生じる。その子が親になるという矛盾関係がまた成立していくわけである。この男・女の触れ合いのない結合とその結果である夫婦と子供を含め「家庭」が形成されていくが、このように人間という生物の存在を省みてみると、そして他方「サービスの再分配」の機構に考えをいたす場合に、「家庭」を最も基本的な「サービス再分配」の場として考えざるを得ないわけである。

欧州大陸では困ったケース、たとえば伝染病、

精神病、精神薄弱、そして老病弱のものができると、施設に収容ケアする長い伝統をもっていた。しかしいろいろな事情から『収容ケアに代えて家庭中心のケア』をという方向へ、ここ15年ぐらいの間にケア対策の理念が一大転換をしている。このことは生物的永存の基盤である機構としての「家庭」の成立と機能とを考慮にいれるときはむしろ当然なことではないかと考えられもする。

人間の人間面をみることはもちろん大切であるが、生きものとしての人間が持っている本性を理解していくことがまた福祉とかケアとかを考える場合の基底として大切であると思う。この意味でさらに生物医学的な論議をすすめてみると、人間

は生物の一種であるから、生物の大原則に従いやすいことは当然のことである。そして、個体保存のためには優勝劣敗の法則がある。生存競争がある。これは利己的働きであり、利己は個体の生存継続上きわめて大切なことである。この観点から見る限り弱者は虐げられやすいことがむしろ当然ともいえるであろう。

弱者は淘汰される。自然界ではそういう約束が厳然たるものになっている。一般生物界においては高齢期まで、否老齡中期まで生きることさえ例外的なケースである。人間も生物である以上口に福祉を唱えたぐらいでは、それも何か自分に関係のないことのように考え、あるいは国家・社会にまかせておけばいい、というようなことでは弱者の立場は救えない。そういうやり方ではせいぜいよくてチャリティに終る公算が高い。なおそれすらできにくいことである。

そこで人間は生物であるけれども、人間という種属である特徴をはっきり意識にのせていくことが大切かと思う。しかも人間の力が多くのものを高齢期まで生きながらえるようにした以上、人間たるの本性を発揮して優勝劣敗の生物法則を超えていけるだけの真の人間性——つまり、慈悲、慈愛の——溢れる社会をつくるべきである。このようにできたときにはじめて私たちはこの地上で福祉を口にしてもよいのではなからうか。このように 20 年前北欧にいてその社会の裏街道をみてつくづく思った。

これは生物界の大法則を克服することであるから元来容易ではない課題である。したがって、北欧型福祉社会であまり弱者の対応がうまくいっていなかったといって、とやかくいうべきことではもちろんない。しかし「人工長命」の世紀においてこの真の人間社会を創建する課題は人間がぜひ取組まなければならない必須の事項であると思う。

ここで家庭問題に立ちかえて考えてみることにする。人間の成長は非常におそく 15~20 年、さらにこの頃は 25 年まで幼稚期があるかも知れない。他方生物の中には卵の殻を割って出ればそのときから自ら啄ばんで生きていけるものもいる。人間に近い猿でもその幼稚期は人間よりはるかに

短い。

この幼稚期とはどういうものを考えると、この期間は先天的に備わっている本能などと違って後天的に創りだした文明とか文化とかを摂取できる高い能力をもつ時期であるといえるであろう。

幼稚期とか成長期とかいう表現はとかく未完成というマイナスのイメージをうけやすい表現かも知れない。ところが、人間の場合、一般の生物と異って幼稚期がとくに長いので母とか父とか、その他出あい触れあう縁のある方たちから後天的な所産を十分受け取って、その上に代々がさらに文明・文化を積み重ねる。このことによって卓越した生物界における地位を占めた。このように見ると幼稚期の長いことはきわめて重要なことであることになる。

この頃の風潮として、夫婦中心、さらにいわゆる個人主義が深まって夫婦の結合すら簡単に切れる傾向がある。アメリカ合衆国では成人の 2 人に 1 人は離婚経験があるやに聞いている。このようななりゆきについてはそれなりの事情があると思う。膨大な新大陸の開拓者として、東海岸から西海岸へ向って、大自然に挑戦した過程においては若さと独立の精神が必要であったことである。

したがって、完璧とはいえないにしても、日本人が最近与えられて遽かに身にまとった個人主義とは違い、鍛え抜かれた立派な個人主義がアメリカにはできあがっていると思う。また欧州社会においては、中世紀の封建制から脱却して行く過程で、すぐれた夫婦中心主義が磨き上げられていると思う。このような立派な夫婦中心主義ないし個人主義にしても、さきほどらい述べているように、80 歳台という人間の寿命の平均限界での挑戦をすることは全く容易なことではない。どうしてもより若い人の手を大なり小なり借りなければならぬことを、欧米社会をみても日本社会をみても必須とせざるを得ないことである。

このような「人工長命」という問題を前にしてもう一度考えてみなければならない人間の問題がある。長い幼稚期を支えるための一組の男女の結合に関してである。つまり夫婦が堅固に結ばれて立派な家庭をつくることが要求される。家庭が健

全であってはいじめて知性的にも情緒的にもまたモラルの上でも均衡のとれた人間が成育する。あまりにも個人主義であり自己中心である家庭、ひいて社会にあっては次の世代をうまく育てあげていくことは容易でないとの認識がまず必要であろう。極端に個人主義化していくと人間の特性である文明・文化の伝承すら難しくなる。

生れたばかりの嬰兒はほっておかれれば人間の場合死を意味する。母の利害を越えた健全な慈愛の奉仕があつてはじめて生きて行け、さらに人間形成が行われていく。これを父や兄や姉が見守り親族が援けその延長として地縁にある人びとたちの拡がりの中で人間形成が立派にできているのが事実である。ここに文明・文化を正しく吸収して発展させていった人間という生物の歴史的発展を認めないわけにはいかないと思う。

このような人間性溢れる慈愛、つまり利他は幼いときだけでなく、人間がつくった「人工長命」を完結させる上で高い意味をもっている。ことに高齢期を人間として生きるにはより若い人の利害を超えた心温まるサービスが必要であることを認めていただきたいわけである。

どのように物的に豊かでも人間としての「人工長命」時代の完結はまことに難しいことである。したがって、日本の現在の傾向とは違って、夫婦中心から家族へ、個人主義から隣保へ、そして国家から小域社会への回帰を基本的な観点から考え直してみるべきではなからうか、これは上述の3つのグループの前においたものが不必要というのでは全くない。それらを充実することはもちろん必要であるが、後者をまた省みていくことが「サービスの再分配」を考える場合にはどうしても必要であると思う。

次には、人間が生物である点で、個体保存の本能よりもさらに強い本能として当然種属保存の本能が人間にもあるはずである。これにどうしても多少言及しないと片手落ちの検討になる。この生物法則は優勝劣敗の法則とはおよそ反対の性格をもっている。つまり利己と対照する利他の働きをここに見出せる。その典型は有限の個体が無限に種属の存続に連なる機構の中に働く利他であり

慈愛であることは既に述べた。

この種属保存の本能については、広い意味での利他ないし類似の働きが同じ種属間ばかりでなく異なる種属間においても存在する。いま例を引いて話すと、縞馬の群を飢えたライオンが追って行く場合、一番弱い遅れをとったものに襲いかかって強者は弱肉を喰らう。自然界はそういう厳しい関係になっているが、他面必要以上の犠牲を作らないという利己抑制のルールがある。これはお互が自然界の中で生きていく大きな大切なルールなのである。自然はこのようにして生態的な平衡を保っている。

このような点からみると、現在の人間、とくにその強者の中には生きものとして大へん面白くないことを平気でしているものがある。たとえば、物物交換は不便であるから貨幣を人間は考えだした。観念として登場した貨幣が現実硬貨とか紙幣とか客観的な姿をとって実在することになると、この金を集めることに非常に執着するものがでてくる。貯めても貯めてもなおかつ貯め込むことになり、そのためにほかの人びとが大へん苦勞しなければならぬようなことになるのは事実である。

また人間は集団生活をする生物である。一人以上いると、横に並ぶか、斜上下になるか、真上下になるか、というような組織された集団を形成する。たしかに組織化は仕事の能率をあげていく上で重要である。しかしいったん組織が客観化されると、その上によって権力を欲しいままにするものがでてくる。そのようになる最も典型的なものの一つはビューオクラシイの傾向である。人間性がほとんど喪われてしまう状況にすらおち込みかねない。一つしかない王位を争って兄弟姉妹ないし親子が血で血を洗う史実があったわけである。観念が客観化された場合、メーンを忘れサブを追う危険を犯す傾向の生ずることを人びとは常に警戒しなければならないことである。

生物は種属保存というエコシステムのための利己抑制ないし利他を確かに守っているのに、人間はそれを大きく破っている。そしてこのことは個体保存の本能の場合とは逆の関係にあると思う。生物である人間が個体保存とか種属保存とかとい

った基本的な生物法則をとにかく無視しているのが産業高度化社会の風潮である。すなわち、利己に走り勝ちで、利己と利他の調和の上に生命の永存の摂理があることを万物の霊長と自称している人間が最も自覚を欠いているようにすら思う。この現実をよく反省して真の永存の基本的条件である利他を「サービス再分配」の基本的事項として現代人は取戻さなければならぬのではなからうか。ことに現代先進国の現状をみては、このように訴えないではおれない。

なお、「人工長命」の世紀に入って大多数のものが80歳台へ挑戦する。これからは殆んどのが弱者の立場を噛みしめ味をざるを得ない。そこで弱者の悲哀は人ごとではない。他方従来の産業高度化した社会というものの行き方ないしその延長では、人力が創り上げた長命を人間らしく完結することはおおよそ至難なことと言って過言ではないのではなからうか。そこで「人工長命」という人類が曾つて経験しなかった、もちろん他の一般生物界にはなかった大変革である「老年問題」に首尾よく対応するためには在来の考え方とはおおよそ反対のことも大いに考えてみなねばならなくなるであろう。これはこの地球上に生きているものが矛盾の機構で生存できていることからいっても当然なさなければならぬ思考方法であるように思う。

それも右と左とみるだけでなくまた正と反とをみるだけでなく、両方の長所を統合し短所を取去って、「サービス再分配」の上でも合としてのサービスを創らなければならぬと思う。このようにして人間性豊かな社会を創建することを共通の目標として、物的なものの見方がつくるイデオロギーを超えて、高く掲げていかなければならぬことである。

同居・別居やスープの冷めない範囲での生活という技術論も大切であるけれども、それにもまして上述したような左・右、前・後、上・下に片寄らず全体としてもっとマクロに、人間の本性に立ちかえって、現実の、そしてこれからの生存の配慮をしていくことが必要ではなからうか。

市川亀久弥先生はこの本性の把握や扱い方につ

いて“等価変換論”という創造理論を出して、これを昆虫の完全変態を例にとりてわかりやすく説明している。昆虫がいわゆる芋虫という幼虫の形でだんだん大きくなっていく間多少とも姿も変っていくけれども、そんなに容姿は変わらない。それが蛹になると根本的な解体が起る。ただし、この蛹期にも気門系、循環器系、そして神経系の基本構造は保持される。そのほかは全部アミノ酸まで解体が進んで再構築が行われる。それではじめて美しい蝶になって飛翔できる。この変態中も秘めて堅持されている基本構造は昆虫の生命と生存を支えるエッセンスである。

今日人間が神業に近い物力をもったことがいろいろな人類の存亡にかかわることを起している。この際人間は生きる、それもよりよく生きるために将来に向けて何を基本として積極的に残さなければならぬか、そしてこのために何を破棄し他面どのような新しい条件を採り上げていかなければならぬか……を深く読みとらねばならぬ。今日はまさにそのような大変革期にある。つまり人類が健全なエージングをしていく上でも一大転機を迎えている。

最も本質的な人間の本性とはなんであるかであるが、それは生物としての人間の素質の保持であると私は思う。この人間の素質が昨今原爆や「老年問題」を含む生物医学的発展などでいろいろな危険に曝されている。したがって本性を保持するための必須条件としても真の人間社会を整えることを大いに急がなければならない。この具象的な表現例として市川先生の完全変態の比喻を借りたが、これから推察しても上述の「サービス再分配」の考え方の基本が鮮明に浮び上がってくることであろう。

というのは「人工長命」を人間として完結するための「サービスの再分配」の真髄は人間性の高揚であるからである。それは真の慈愛に満ちた人間社会づくりに通じる。そしてそれがサービスとして展開できる前提は人と人との触れあいが必須条件になる。ところが、このことは有限の個体が無限の存在に連なる可能性を開く男・女の触れあい、親子の触れあい、そして環を拡げたもろもろ

の触れあいと密に繋っていく。この触れあいの本質は利他的行為で、人間の場合人間性の高揚であり慈悲の心証といえるであろう。鳥獣すらこの生存の根源的な条件として、個体保存と種属保存をみても、利己と同時に利他を全く必然のこととして番は相愛し難を慈しみ育てている。

釈迦は無明の因が一組の男・女を縁として新しい生命である子が誕生する因縁の尊さを説いている。つまり人生は父母の慈悲に包まれて始まるし、その育成には多くの人びとの利他的行為の恵みを受ける。「人は独りで生れてきたように独りで死んでいくものである」と世俗的には囁く声を、それも昨今の——利他を全く忘却し利己に著しく偏している社会である——日本でとくによく聞く。しかし上述でも明らかなように生誕は人間の場合孤独では決してない。最小限生みの母の慈愛が伴っている。人間でありそれも「人工長命」を創り出したからには、生誕と同様、死もまた孤独でなく、さらに老齢期も孤独ではなく、慈愛にかこまれ自らも慈愛を重ねて人生を完結し涅槃・入滅するようではなくてはならない。

日本の現実的自我に執着し物欲に走って昭和元祿に流されている。そして禽獣でさえ自ら弁まえている利己と利他との両輪を調和することの必然

性をおよそ忘れ去っている。このような世潮から脱却する上で最も必要なことは人間愛であり、これを裏打ちする人間学であって、またこれによる人間教育であると考え。かかる視点から「人工長命」と高齢化社会の出現に伴ってとくに注目しておくべきことは、次のような老齢期の特徴をどのように大きく生かすことではなかろうか。

50歳、60歳そして70歳を加齢とともに肉体的に衰えが進みに進む、けれども、人間の特長である精神力は保ち方と修練によっては高齢期まで非常に高く保持できる。この可能性を大いに開発することによって、老人人口の増加した社会は、それだけ人間性の高揚された状態を顕現する希望がもてることである(65~85歳の老齢期、20年間を多くのものが享受できるようになったことは、図2を見れば直ちにわかるように、人生後半では加齢とともに体力は減退するが、人間の特長である精神力は努力次第で存外高く保てる可能性がある。人間性の高揚がより大きく発揮できるからである。)

以上要約すると、「人工長命」の世紀に入ったこれからは生物としての人間がもつ特性にも着目し一段と人間性溢れる真の人間社会を創建することが「老年問題」対応の必須条件である。そして、

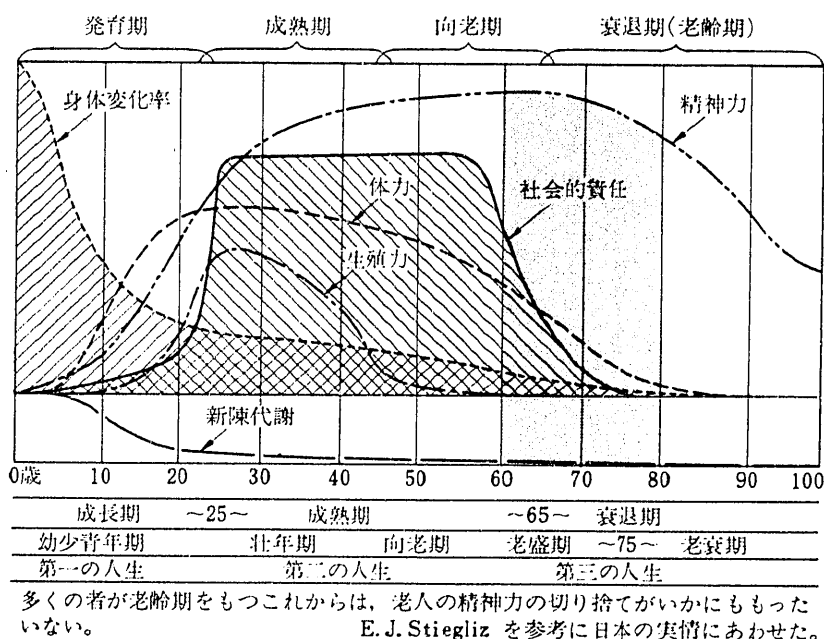


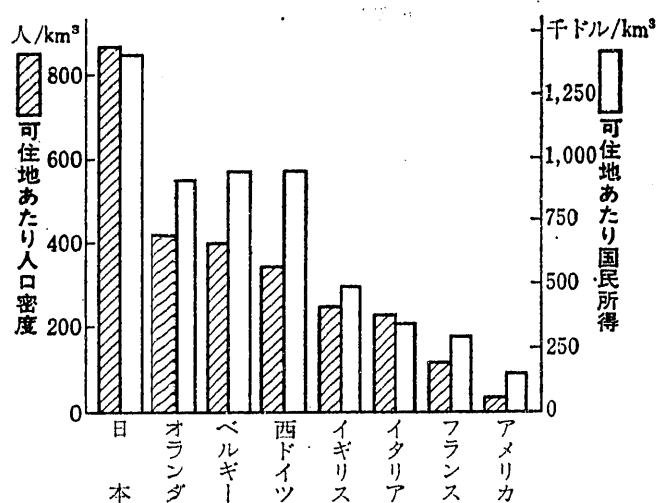
図2 生涯における身体変化率ならびに心身機能変化と社会的責任

その必然性と可能性について愚考するところを披露した。

ここでまた少々話の方向を変えたい。「神」があった時代はその権威によってどのような強者も神を畏敬することによって弱者をいたわり大切にもした。ところが、科学、それも狭い意味の科学にとりつかれて、その代替として「人権」という錦の御旗を掲げ自由と平等が高らかに叫ばれた。しかし、こうなると、自然の真のルールをはき間違えないし無視するものがでてきて一代限りの自己中心の行動をすることに歯止めがかけ難くなった。元来能力差があり、生れたときの条件すら平等ではないわけであるから、自由を捉んだ強いものが奔放な収奪をやりかねない。その結果弱者は必要以上に苦しめられることにすらなりがちである。人権が叫ばれるようになってから人権が損われた方がむしろ多いのではなからうか。

神のいた時代の方が、物は乏しく厳しかったが、そこには豊かな人間性があった。現在のいわゆる先進国社会においては物は豊かであるけれども、そこにはむしろ非人間的な、さらに非生物的なものすら形成されている。このことを「老年問題」をめぐってもわけて日本の場合には一日も早く国民全体が認識し反省しなければならないし、そして世界のどの国にも先がけてその対応と腐心しなければならないことである。というのは超高密度社会であるだけに産業の高度化のプラスもマイナスもこれからは徹底してかつ急激に顕現してくるからである。(図3は日本が世界のどの国よりも人口でも土地でも生産でもとびぬけて超高密度であることを伝えている。)

戦後とくに物力に執着してきた日本人は、今日、未曾有の大転換期を眼前にして、価値観、世界観の見直しを大きく迫られている。というとなにか私が過去の神の時代にかえるべきであると言っているかのように疑う方もあるかも知れないが、決してそのようなことを言っているわけではない。仮りにそう思っても史的経過をとって生じたことはもとへかえれるものではない。ただ狭い科学性あるいは専門性というミクロの立場に立ってとかく大きなルールを無視し派生的な分派的な行動を



全く狭い国土に、膨大な人口が集まって、しかも極端な産業の高度化が行なわれている。
日本興業銀行『70年代の日本産業』、OECD資料。

図3 超高密度の日本

ほとんどのものがとってきている現状を一日も早く脱却する。そしてミクロと同時にもっとマクロな方向を見るべきではなからうかと訴えているのである。これが昨日の第一議題を設問した理由であった。

なお生物であり人間であるという上述の基本的な観点から次のような「老年問題」対応の理念が当然でてくる。つまり『老人も人である』という人間性尊重の民主主義精神に立つ。この基本理念からは当然自立自助という現代社会がもっている社会福祉理念が方法論としてこの理念の裏打ちになる。さらにこの理念と方法とを日本にいう場で具現できるためには「経済原則を満足する」などを含む5つほどの付帯条件を満たさなければならないと考えている。これらの説明は割愛せざるを得ないが……。

上述の理念と方法と条件を具象化してみると、お手もとの図4に示すような「参加型老人サービス・ユニット」になる。この体系を構成する三大機能として「家庭」と「施設」、この二大機能の間に「媒体」という機能をおく、「媒体」を通して「家庭」と「施設」のもつ長所と短所を止揚・統合して合としての優れた働きを発揮させようとする機構である。なおこのユニットを別な観点からみると、教育を含む就労、医療を含む保健、お

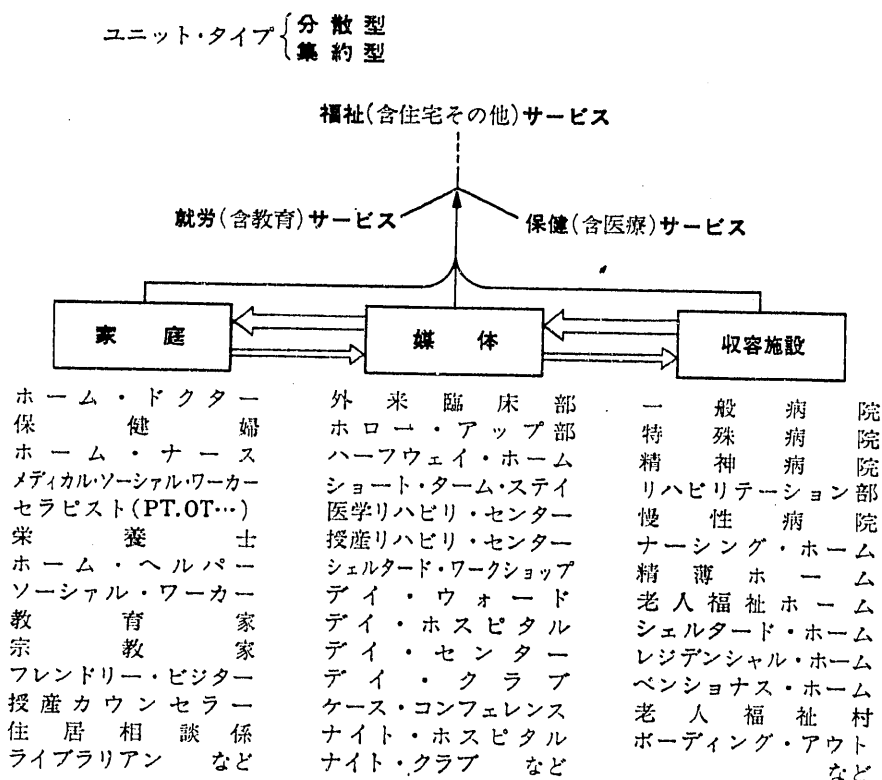


図 4 老人サービスユニット

よび住宅などを含む福祉の三大サービスの協力体系である。教育ならびに就労を老人の場合にも重視している点を留意されることを願う。

この10年前後の私の日本における「老年問題」をめぐるの社会医学的研究は主にこの「媒体」に関するものであった。それによってどのように人間の生活力、人間性、社会性などを最小の労力と経費と施設であげうるかが研究のねらいであった。今日日本ではこれらのことがデイ・ケアとかショート・タイム・ステイ・サービスとかいう形でようやく登場しはじめている。これら「媒体」機能を私は「媒体」のテクニカル・ユースと称してきた。これに対し施設の内外を含んだ広義のケース・コンフェレンスやローカル・エデュケーション(地域ぐるみ教育)を「媒体」のポリティカル・ユースとしてその効用を明確にしてきた。これらについて1972年のキエフにおける第9回国際老年学会ならびに1974年のトロントにおける第8回世界社会学会で報告した)。

現代社会は、産業高度化の波に乗って、多様化

し、専門化し、派生化していろいろ複雑化している。そこで、上述のサービス・ユニットを展開するには「多目的機能共同地域社会」を創建しなければならない。このような際にはわけて「媒体」のポリティカル・ユースが有用で、大小のソーシャル・アクションの効用を発揮する。

なお上述の地域社会機構は小・中および広とピラミッド型に重層化した体系となる。そして小域においては現代社会の、上に述べたような多様化、専門化などの傾向に対抗し、これらを修正するために徹底して“よろず”の機能を備えたワン・ドア・システムのセンター的機構の構築が必要である。より専門的なニーズの対応を行う中域、広域はこれら小域の上に体系化されて初めてよく機能することになる(これについては1978年の東京における第9回国際老年学会にて報告した)。

私たちは豊かな人間性の高揚に関して老人を積極的に包擁するフィールド・ワークを数年来試みてきた……。既に述べたように、私は「サービス再分配」の基本を「家庭」にしているけれども

出生率が漸減し、他方 80 歳台まで多くのものが生残するようになった結果、近い将来は一夫婦平均して 1 組の父母と 2 子、ときには祖父母と孫をも扶養しなければならないことにもなりかねない。このような扶養の重荷はとて一大家族では上首尾に担いきれないことが察せられる。そこでこの数年来、隣人からさらには小地域社会の構成員全員ぐるみの扶養機能づくりを目的としたフィールド・ワークを試みてきた。

そのフィールドの一つである西陣堀川地域を本日の午後には外人の方がたにはぜひみていただきたいと願っている。日本の風土の上で新しい時代の要請を向うにまわして、どのようなケア・サービスが実際にできあがっているか、できあがりつつあるかを、見聞の上、批判と助言をいただきたいと存じている次第である。

ここで蛇足を付け加えると、日本の社会の義理人情とか、相互扶助とかまた甘えとか、さらに寄り掛かりとか、これらの風習は唾棄すべきもののようによつていわれてきた。けれどもこれらのものは超高密度な日本的条件の中で、きわめて起りやすい人間としての極端な触れあいの摩擦を適当に調和していく智慧であったことも認めるべきでは

なかろうか。そういう点、アメリカのような手を振り回してもぶつからない広大な国土をもつ国家社会とは大へん違う。家族関係とか隣保関係とかの触れ合いで長い経過を通じて日本の社会にできあがってきた風習である。これらを正しく——歴史的視点の上から見返して——新しい回帰の相の次元で生かしてもいかなければならないと思う。

西陣堀川の住民たちは『自分たちの健康は自分たちの努力で買い求めよう』という自主的な立上りをした生活協同組合式方で医療機関を設営してきている。この地域活動の中に旧くて新しい日本の片鱗を見出されることであろうと思う。

以上「サービスの再分配」機構に関して人間の結合の座をどこに求め、その上にどのように形成していくべきかにつき述べた。またその可能性を「人工長命」の得失と日本の伝統のどこに秘めているかにつき少々述べさせていただいた。それらの話の展開にあたって、とくに生物医学的な観点をまじえて述べる仕方をとったが、このことはこのたびのシンポジウムの日本側演者が社会系の方が多かった中の只一人の医師演者ということからであった。ご静聴を感謝する。